



■主な内容

- 『1×1コレクション展の記録』の発刊
- 特集：阪神淡路大震災から30年
「阪神・淡路大震災30年」シンポジウムを聞いて考えたこと
2025年1月17日30年目のあの日
- 第2回能登半島支援カフェ報告
能登の方々と話す

能登半島支援 第2回「お茶カフェ
& 住宅相談」七尾市田鶴浜地区垣
吉町第一仮設団地の集会所前での
集合写真 (写真：稲垣弘子)



『1×1コレクション展の記録』発行について

Publication of "1×1(One by One) Collection: A Record of the Exhibition"

岸本 裕子

KISHIMOTO Hiroko

2024年7月に日本建築学会の建築会館ギャラリーで開催した「1×1コレクション展」の記録集が、この度発行された。この記録集は展示された47作品と展覧会に関連する事項をまとめたものだ。

この展覧会のために発足した8名によるプロジェクトチームでは、コレクション展を開催するまで、また展覧会後の記録集作成のため、度重なるZoomミーティングを行ってきた。中でも応募要項のキーワードとなる「仕事上の大事なきっかけ＝ブレイクスルーとなったアートワーク」に辿りつくまでにずいぶんと時間を要した気がする。質疑・応答のできるZoom説明会も数回開催し、1×1プロジェクトに関心を持った方々に熱心に参加していただき理解を深め出展に至った。そうして作品(Work)とともに英訳付きの手書きの作品解説とプロフィールが展示会場に揃ったのだ。

今回の冊子ではその3点と作者の顔写真を出展者ごとに見開きA3サイズという大きな紙面に構成した。記録集制作のためデータをプロジェクトチームに提出された方の作品は、解像度も高く紙面に美しく収まったが、この世にたった一つしかない手作りのパネルの中には、現場記録データなど、どうしても解像度が足りない作品もあり、装丁の朝倉恵美子さんがいくつものデータをデスクトップ上で再構成し、なんとか会場での精度まで作り込んでくれた。

また47作品の他に、開催に合わせお招きしたドナ・

デュネイ IAWA 名誉議長の講演会の記録やデュネイ夫妻の東京滞在記、設営から撤収までの様子、会場アンケートの集計と感想なども掲載されている。

ページをめくりながらそれぞれの歴史、熱い思いが詰まったブレイクスルーをゆっくりご覧いただきたい。そこには女性ならではの視点や、しなやかな生き方、常識に縛られない自由な発想など感じられると思う。そして平野賛助会員が撮影してくれた作品前での出展者の笑顔が皆一層輝いて見えてくるだろう。

改めてご後援いただいた各団体の皆様、関係者の方々、そして「1×1コレクション展」のポスターをはじめ冊子の装丁をご担当いただいた朝倉様に感謝いたします。

1×1プロジェクト実行委員会

委員長：森田美紀

委員：井出幸子

伊藤京子 薄井温子

小川信子 岸本裕子

正宗量子 松川淳子

アドバイザー：江口陽子

英語編集：キャレン・セバンズ

仏語編集：北本美江子

装丁・DTP：朝倉恵美子

完成した記念誌

(写真：井出幸子)



第33回 UIFA JAPON 2025 年度総会および記念講演会のお知らせ

The 33rd UIFA JAPON General Meeting and Commemorative Lecture

■日時：2025年6月14日(土) 総会および記念講演会

■場所：建築会館会議室 301・302 (東京都港区芝5丁目26番20号3階)
対面・オンラインの併用形式

■講師：安田幸一氏(有限会社 安田アトリエ代表 東京工業大学名誉教授
近年、土浦亀城邸・復原設計を行う)

「阪神・淡路大震災 30 年」シンポジウムを聞いて考えたこと
30 Years after the Great Hanshin Earthquake

宮本 伸子
MIYAMOTO Nobuko

●シンポジウムの概要

2025 年 1 月 7 日に防災学術連携体主催で「阪神・淡路大震災 30 年、社会と科学の新たな関係」シンポジウムが開催され、オンラインで参加した。

今年は、阪神・淡路大震災から 30 年という節目に当たり、色々な行事や学習の機会がありそうだが、その皮切りである。阪神・淡路と銘打っているが、発表されたプレゼンテーションは、そのあとの東日本、熊本、そして 1 年前の能登半島という地震災害、そして毎年のように起きている水害や土砂災害も含めた自然災害を網羅したものも多く、更に関東大震災から 100 年であること、そして昭和という激動の時代がやはり 100 年を迎えることも踏まえた発言や問題指摘も多かった。

セッションは右下に示した通り、防災学術連携体に所属する学会の総力が傾けられているものであり、同団体の Web サイトではプレゼンテーション資料を閲覧することができる。いずれも興味深い内容であったが、特に新しい視点として気付かされた提案について報告したい。

●災害リスクコミュニケーションへの提言

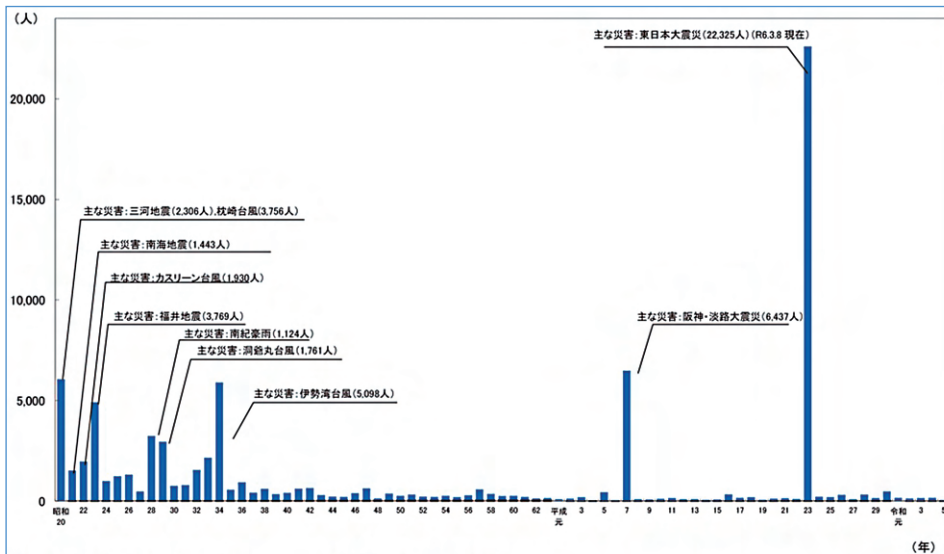
発表者は京都大学防災研究所の矢守克也氏、タイトルは「阪神・淡路大震災と災害リスクコミュニケーションー防災情報と社会の観点から」というものであった。まず新鮮だったのは、下の参考図に示す我が国の自然災害での死者・行方不明者数の推移で、戦後 1959 年の伊勢湾台風までは地震や台風で千人を超える人的被害があった

が、伊勢湾台風で富士山のレーダーができ、防災の日が指定され、災害対策基本法ができた。そこで進んできた様々な対策により、自然災害の人的被害は極めて少なくなった。ところが、阪神・淡路大震災で 6 千人を超える被害を出し、「安全神話の崩壊」と言われた。そして、東日本大震災で 2 万人を超える被害を出し、「想定外」となった。

ここで矢守氏は問う。「想定外が課題だったので、次はそうならないように、もっと範囲を広げて想定内へと組み入れて伝えます」というリスクコミュニケーションのスタイルが、安全神話や想定を生み出し、その結果として新しい被害事例を生み出しているのではないかと。想定外だったことの更にその外側からくることには対処できないのではないかと。常に想像していなかったようなことに対処できるような体験をするようなリスクコミュニケーションが必要なのではないかということだった。

そこで提案されているのが津波避難戦略検討システム「逃げトレ」、そしてもっと普遍化した手法としての防災ゲーム「クロスロード」だった。クロスロードは、色々な段階で分かれ道を選んでいくゲームであり、正解はないというのがポイントで、みんなでやりながら、そういう考え方もあるという新鮮な驚きを共有しながら、学んでいくことに意義がある。このようなトレーニングをして、想定外が起きた時にパニックになるのではなく、冷静に考え、判断していけることが防災や BCP にもつながると学んだ。

※ BCP とは Business Continuity Plan



注) 令和 5 年の死者・行方不明者は内閣府取りまとめによる速報値
出典：昭和 20 年は主な災害による死者・行方不明者 (理科年表による)。昭和 21~27 年は日本気象災害年報、昭和 28 年~37 年は警察庁資料、昭和 38 年以降は消防庁資料をもとに内閣府作成

防災学術連携体シンポジウム
阪神・淡路大震災 30 年、社会と科学の新たな関係

2025 年 1 月 7 日 10:00 ~ 18:30

【趣旨説明】 社会と科学の新たな関係をめざして
平田直 (東京大学名誉教授)
【基調講演】 脆弱な社会が生んだ大震災
和田章 (防災学術連携体代表理事、東工大名誉教授)

- 1 建物・インフラ等の被害と対策
地震学・地震工学の観点から 藤原広行
建築構造の観点から 林康裕
土木構造の観点から 高橋良和
地盤・基礎、地中構造物の観点から 東畑郁生
- 2 救援・医療・避難、応急対応の変化と課題
消防組織への影響、変遷 鈴木健志
自衛隊への影響、変遷 山本忠雄
医療支援の観点から 大友康裕
避難所・仮設住宅生活支援の観点から 酒井明子
- 3 法律・制度・市民の意識の変化と課題
防災・復興まちづくりの観点から 牧紀男
市民社会の観点から 立木茂雄
被災者再建制度の観点から 津久井進
防災情報と社会の観点から 矢守克也
- 4 学協会発表 阪神淡路大震災 30 年に寄せて
日本活断層学会はじめ、18 の学会からのプレゼン

防災学術連携体の Web. <https://janet-dr.com/index.html>

参考図 令和 6 年版防災白書より一付属資料 2「自然災害による死者・行方不明者数」(講師使用図)

2025年1月17日 30年目のあの日
January 17, 2025: 30th Year Since that Day

上田 壽子
UEDA Hisako



関西人にとって、また建築に携わるものとしてこの日付は忘れられない日だ。歳を重ね、阪神淡路の大震災から30年が経った。

左：30年前、息子とともに

●発災したその時

当時は保育園に通う息子と二人暮らし。ガガガタガタといつもの地震の揺れとは全く違う揺れにとっさに寝ている息子を何とかしなくては…と抱いて、TVをつけた。住まいは1981年築のRC造6階建ての5階部分のマンション。揺れは一時で終わった、そう感じた、がその後余震がやって来た。

その当時は設計した老人ホームの工事が始まったばかり、そして、その日は杭打ちの最初の日だった。息子を保育園に送り、そのまま現場に駆け付けたところ工事業者が来ない、杭打機も届かない。どうなっているのか…当時現場事務所にはTVもなく、やきもきするだけ。家に帰ってやっとそのびっくりするようなあり様をテレビで目のあたりにした。奈良は県庁の正面ガラスが割れたとの記事だけだった。長田区の友人は大丈夫か！その当時スマホもなくそろそろガラ系の携帯電話が出始めたころか。二週間ほどで連絡が付き無事だと。今欲しいものあるかと聞いたら「水の要らないシャンプー」という返事で荷物を集めて送った。

彼女の隣のアパートは軽鉄3階建ての建物で死者13名だったこと、崩れ落ちたその建物の撤去にはずいぶん時間がかかったと、後で聞いた。

●行政からの要請で、応急危険度判定のため現地入り

約1月くらいたってから建築士会から現地入りの招集があった。各自ヘルメットと昼食のお弁当持参で自力で神戸三宮まで来い！トイレは・・・何とかしろ！

その当時JRも寸断されて途中からバスに乗り換えるか・・・いろいろ手立てを考えたが、一番楽で速いのは大阪南港から神戸ハーバーランドまでの定期船だった。30分余りで神戸には着いたが、そこからが歩くのみ。

神戸二宮あたりが担当だった。一度応急危険度判定はしたけれど再度要望あり、地図も持たされて、5名くらいのグループで移動するようにとの指示。全員ヘルメット姿なので「うちも見てほしい」という切羽詰まった声が何件も掛かる。それに全部対応しながら移動し続けた。道路に傾いて斜めになっているビルがあり、完全にクラッシュしている家屋もあり、悲惨な状況だった。私たちは「これだけ歩いたのは初めてや。ゴルフよりよう歩いてる」とブツブツいいながらおじさんたちは家路につき、私はまた船に乗って大阪へ、近鉄電車に乗り継いで家に帰った。

●2025年1月15日近畿整備局シンポジウム

大阪天満橋にあるOMMビルでのシンポジウムに参加した。基調講演は関西大学の奥村与志弘教授「阪神・淡路大震災からの30年に学ぶこれからの防災・減災」と阪神淡路大震災の語り部、神戸学院大教授の菅原隆喜氏の「阪神・淡路大震災と地震火災」。後はパネルディスカッションで京都大 矢守克也氏、兵庫県土木部長上田浩嗣氏、産経新聞社岸本佳子氏、建設連合

会の北岡隆司氏、神戸市建設局長、小松恵一氏、近畿整備局高橋伸輔氏、和歌山県田辺市長、真砂充敏氏の7人。

定員300名のところキャンセル待ちまで出て、約500名の参加だったようだ。概要は、

- ・公式には亡くなった方が6434人。しかしこれには災害関連死はカウントされていない
- ・地域火災が多いのはおおむね電熱関連、通電が始まり熱ヒーターからの出火
- ・ガスは震度5でストップする
- ・コンクリートブロック塀の転倒多い
- ・家具の転倒家具の固定がまだまだできていない
- ・神戸市の火災は65件 消火栓が少なかった
- ・当日長田地区の火災が起こったが、まだしも風がなかった（震災火災の写真を見ると煙がまっすぐ上に伸びている）何年前にあった新潟県糸魚川市の大火災は不運なことに海風が強くと写真は海から陸に向けて強く吹き大火災となった（煙は海側から陸に向かって横になっていた）



(シンポジウムのポスターから)

●記憶の中の神戸と今の神戸

最近の関西のテレビは震災関連ばかりで、たまたま見たのが阪急電車の復興の自社映像で、電車が同じ方向に並んで走っていた。これは線路を新しくして電車同士ぶつからないかのテスト運転だそう。数か月かかるといわれた復旧も24時間体制で臨んだところずいぶん短くなったとのこと。そういえば当時山陽新幹線の橋脚も落ちてしまっていて通行不能、新幹線もJRも阪神電鉄阪急電鉄も鉄道はすべて止まった。阪神高速道路の橋脚が倒れた映像はあまりに衝撃的だった。

震災が起こる前、神戸はとても明るく楽しいおいしいおしゃれなところで、行きつけのお店がいくつもあった。素敵なインド料理のお店も被災したし、カキ専門店のお店もなくなった。今またおしゃれな街に戻ったが、どうしても足が遠のいてしまう。そんな「私の神戸」だが、皆様、神戸に来て、神戸の「人と防災未来センター」また淡路島の「北淡震災祈念公園 野島断層保存館」などじっくり見ていただきたい。

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2025年4月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

URL :http://uifa-japon.com

第2回能登半島支援カフェ報告

能登の方々と話す

Communicating with the People of Noto

今回のお茶カフェ+住宅相談は3月15～16日の二日間で、七尾市田鶴浜地区と珠洲市宝立地区の2か所の仮設住宅内の集会所をめぐる予定です。内閣府から交通費の補助が出る予定ということもあり、学生側の参加者が11名と、いままで能登に行ったことがない学生も参加できる良い機会でした。

1日目の田鶴浜でのお茶カフェ+住宅相談は今回が2回目で、前はまだまだなかった仮設住宅内の集会所で行うことができました。この集会所は自治会長ほか地域の方々が行政に求め続けたもので、念願のものでした。冬場の寒い仮設住宅の住居内とは異なり集会所の中は暖かく、憩いの場となっています。今回のお茶カフェにも20名ほどがいらっしやり、色々なところでいろいろな話をしていました。地震発生から1年以上が経ち、心身にたまっている疲労が少しでも楽になってくれたらいいなと思っています。田鶴浜のお茶カフェにいらっしやられた方は地震とそのあとの現実に関しては諦めたうえで、未来を悩んでいるように思えました。田鶴浜内も被害住居の公費解体が進み、新築の建設が進んでいます。能登に住む方々にとって、家は先祖代々受け継いだものという感覚が強く、家と人



七尾市田鶴浜地区垣吉町第一団地集会所でのお茶カフェ+住宅相談では、お抹茶のお届けサービス(右)も実施。左の中央で話しているのが執筆者の西内氏。(写真:左は岩井紘子 右は有村尚子)

西内 大翔 (東京大学工学系研究科建築学専攻)

NISHIUCHI Haruto, Graduate School of Engineering, University of Tokyo



珠洲市見附島公園内宝立町第2仮設団地集会所でのお茶カフェ+住宅相談では、公費解体と工事費の高騰に憂え、工事職人の宿泊施設をつくるのが急務との話(右)、また、民謡「砂取節」も出て(左)賑やかだった。(写真:左は稲垣弘子 右は井出幸子)

生は都会では考えられないほど密接に結びついています。その意味でもお茶カフェと住宅相談会が一緒になっているこの会の意義は大きいと感じています。

2日目の宝立の仮設住宅は坂茂氏による設計で、復興公営住宅への移行も念頭に置いたDLT構造(新しい木構造)を用いた2階建てのものです。その仮設住宅に住むおばあちゃんと話したのですが、地震で家をなくし、知り合いも30人ほど亡くし、70年以上見てきた島や浜辺の雰囲気がかわってしまったと仰っていました。なんと声をかけていいかも分からず、一緒に涙を流すだけでした。どの話題でも地震か豪雨の話に帰着し、同じ震災でも被害の大きさや付随する心の傷は地域により大きく異なることを痛感しました。一緒に行った学生も各々感じることはあったみたいで、「能登はやさしや」と地元の方から聞きますが、能登にボランティアとして入っている私たちも能登の方々から様々なことを受け取っているのです。能登の皆さん、また伺います。今後ともよろしくお祈りします。

■役員会報告

2024年度第7回/2025年1月17日

小川圭子氏オンライン講演会報告/都庁「能登半島支援報告会」報告/能登カフェ準備/吉田文子氏資料について/勘どころ本を山形へ/WEB交流会準備/NL129号発刊・発送

2024年度第8回/2025年3月12日

1×1展記念誌発刊・発送報告/IAWA常任理事会へ松川名誉会長参加準備/来年度総会・記念講演会準備/オンライン講演会準備/能登カフェ準備/NL130号編集報告

■編集委員からひとこと

能登カフェに集う人々と温かいお茶をいただく(薄井)/能登地域型復興住宅(木の建築フォーラム)パンフレットを作って現地入り、進まぬ復興を見、「まだまだこれから」(井出)/桜の中、加古川鶴林寺に47年ぶりに行ったら、歴史的事実が進展していた(宮本)/能登訪問で復興には時間がかかることを実感した(有村)/3月にトルコの遺跡や地下都市、宮殿などを巡る視察旅行に参加し、建造物や文化の深さに圧倒された。(牛山)/それぞれの地に根付き、歌い継がれた民謡の力を再認識した能登のお茶カフェ、北部九州では炭坑節かも・・・(編集長平野)